

論文の内容の要旨

論文題目 建築における「オブジェクト批判」の系譜 - 1990年代コロンビア大学における初期ペーパーレス・スタジオの建築家を中心とした建築言説の考察

氏 名 平野 利樹

本研究は、1990年代中頃のニューヨークのコロンビア大学建築学部において、ペーパーレス・スタジオ(Paperless Studio)の指導をおこなっていた若手建築家たちによる言説に注目する。ペーパーレス・スタジオは、世界でもいち早くデジタル・テクノロジーを建築教育に導入した建築設計スタジオの総称である。

1990年代は冷戦終結後、グローバリズムが加速した時代であった。1989年の東西ベルリンの壁の崩壊、1991年のソビエト連邦解体による冷戦の終結、それに続く1993年の欧州連合発足は、国同士の政治的な境界の消失の象徴的な出来事である。グローバリズムによってあらゆるものの境界が消失し、流動的に繋がってゆくという世界像が、この時代に形成された。1990年代は、デジタル・テクノロジーが一般にも広く普及し始めた時期でもあった。ワールド・ワイド・ウェブ(WWW)によって、人々は世界中からアップロードされる膨大な量の情報の間を自由に「サーフィン」できるようになり、BBS(電子掲示板)やIRC(インターネット・リレー・チャット)によって、不特定多数の人間が地理的な距離に関係なく匿名でコミュニケーションをおこなうことを可能にした。またコンピュータ・グラフィックスの技術も、コンピュータの処理能力の向上とともに急速に発達した。哲学思想分野において、上述したこれらの状況を巧みに自らの思想に取り込んだのが、ポスト構造主義の思想家たちである。その中でもジル・ドゥルーズ(Gilles Deleuze)とフェリックス・ガタリ(Félix Guattari)は、「襞」「平滑空間」「リゾーム」「分子化」「生成変化」などのキーワードを用いて独自の思想を構築し、それは「接続の思想」として一般的に解釈された。つまり、多様な要素がそれぞれ個別に自律するのではなく、平等なヒエラルキーのない存在として等価に接続され、共存しているようなモデルである。そのようなモデルが、この時代において形成されたといえる。そして彼らは、そのような社会状況やテクノロジー、そして思想の急激な変化を察知し、それに対応した新しい建築のあり方と言説の構築を試みた。

当時のニューヨークでは、歴史主義的なポスト・モダニズムと、それに対してデコンストラクティビズムという二つの大きなスタイルが存在していた。これらのスタイルは、当時すでに地位が確立された建築家たちによって主導されていた。これに対して、グレッグ・リン(Greg Lynn)、スタン・アレン(Stan Allen)、ジェシー・ライザー(Jesse Reiser)、ハニ・ラシッド(Hani Rashid)など、ペーパーレス・スタジオに関わること

になる、当時はまだ駆け出しの建築家であった彼らは、いずれのスタイルも否定し、デジタル・テクノロジーや新たな思想を取り込みながら、先述したような時代の変化に対応する新しい建築あり方を追求した。彼らは、それぞれ独自の思想をもって、新しい建築のあり方を追求し、それを体現する作品を生み出していった。当時彼らが指導したペーパーレス・スタジオの課題内容には、彼らの思想が反映されている。また、ペーパーレス・スタジオが、彼らが新しい思想を構築する触媒ともなった。

彼らによって生み出された思想や作品は多種多様であり、デジタル・テクノロジーをいち早く導入した教育プログラムで指導をおこなったということ以外に、そこにひとつの傾向性を認めることは一見困難である。ここで重要となるのが、「オブジェクト」という語である。「オブジェクト」という語を通して、彼らの言説および作品を読解すると、「オブジェクト」としての建築のあり方からの脱却の試行という共通性が現れてくる。

さらに、この語に着目することによって、ペーパーレス・スタジオの建築家たちの思想と、彼らが活躍した1990年代以前、そして以後の時代における言説・議論との関連性も浮かび上がってくる。コーリン・ロウ(Colin Rowe)やピーター・アイゼンマン(Peter Eisenman)による1990年代以前の言説は、ペーパーレス・スタジオの建築家たちの思想に多大な影響を与えている。また現在おこなわれている、建築における「オブジェクト指向存在論」の議論は、ペーパーレス・スタジオの建築家たちの言説における「オブジェクト」の概念を批判的発展の土台として成立している。

ペーパーレス・スタジオの建築家たちの言説を中心としながら、これに関わる過去から現在までの言説・議論を、「オブジェクト」という語を通して考察し、その理論的な位置づけをおこなう。これが本研究の最終的な目標である。

先述したように、本研究では、ペーパーレス・スタジオの建築家たちの言説を中心としながら、これに関わる過去から現在までの言説・議論・作品を収集・考察し、「オブジェクト」という語を通して体系化する。しかし、これには困難が伴う。というのも、それぞれの建築家によって、「オブジェクト」という語の定義の仕方は多様であり、それが持つ意味が非常に広範かつ曖昧であるためである。本研究では、1990年代というペーパーレス・スタジオの建築家たちの時代を中心として、彼らの思想のキーコンセプトに(そしてそれらが)影響を与えた人物、その言説、そして議論を取り上げ、これらを通して、ペーパーレス・スタジオの建築家たちの言説に眼差しを向ける。

なお、本研究が対象とするのは、あくまでもペーパーレス・スタジオ周辺の建築家たちの言説や作品であって、ペーパーレス・スタジオそのものではない。つまり、ペーパーレス・スタジオそのものの教育理念やシステムを詳らかにすることは、本研究の主たる目的ではない。

本研究ではまず、ペーパーレス・スタジオ以前の人物たちの建築言説を読解し、彼らの思想、そして「オブジェクト」という語の捉え方を検証する。つづいて、ペーパーレス・スタジオの建築家たちの中心的な言説を読解し、さらに彼らとペーパーレス・スタジオ以前の人物たちの思想とのつながりを検証する。次に、オブジェクト指向存在論について概説するとともに、ペーパーレス・スタジオの建築家たちの言説を批判的発展の土台とする、現在のオブジェクト指向存在論についての建築における議論を整理する。

そして最後に、これらの考察を敷衍し、ペーパーレス・スタジオの建築家たちの言説の位置付けをおこなう。

本論文は、以下に示す5つの章から構成される。

- ・第1章 ペーパーレス・スタジオの建築家以前の言説(1960-70年代)
- ・第2章 ペーパーレス・スタジオの建築家以前の言説(1980-90年代初頭)
- ・第3章 ペーパーレス・スタジオの建築家の言説(1990年代)
- ・第4章 ペーパーレス・スタジオ以後の建築言説(2000年以降)
- ・第5章 結論

第1章では、ペーパーレス・スタジオの建築家以前の建築言説として、コーリン・ロウと、ピーター・アイゼンマンの1960-70年代における言説を主に取り扱う。ロウの言説については、アイゼンマンやグレッグ・リンの思想に大きな影響を与えた『理想的ヴィラの数学』を概説するとともに、『コラージュ・シティ』におけるオブジェクトの概念を整理する。アイゼンマンについては、初期の論考や作品を概説し、その思想をまとめるとともに、その中に見られるアイゼンマンのオブジェクトの概念を整理する。

第2章では、1980-90年代初頭のアメリカにおける建築の思潮を整理する。ここでは、アメリカ東海岸を中心として形成された、ポスト・モダニズムとデコンストラクティビズムという大きく二つの潮流について、第1章での議論をふまえながら整理する。また、アイゼンマンについて、第1章で論じた時代以降の言説と作品をたどり、その思想をまとめる。

第3章では、1990年代のペーパーレス・スタジオの建築家たちの言説を検証する。ここではまず、ペーパーレス・スタジオについて、その概要を紹介する。次に、グレッグ・リン、スタン・アレン、ジェシー・ライザー、ハニ・ラシッドら、初期ペーパーレス・スタジオの建築家たちの言説や作品、ペーパーレス・スタジオでの活動を辿る。また、ペーパーレス・スタジオ周辺の状況も概略することで、当時の建築思潮を明らかにする。

第4章では、ペーパーレス・スタジオ以後、2000年代以降の建築言説を整理する。ここでは、ペーパーレス・スタジオの建築家たちの言説を批判する形で発展を試みている、建築におけるオブジェクト指向存在論を主に取り上げる。これにあたって、オブジェクト指向存在論の概要を整理する。そして、建築におけるオブジェクト指向存在論の議論の論点を明らかにする。

第5章では、第1章から第4章までの考察を整理し、ペーパーレス・スタジオの建築家の言説の位置付けをおこなう。さらに、本論文において得られた知見の応用可能性について、いくつか示唆をおこなうことで論文を結ぶ。